

家庭の調理簡便化とその周辺 Ⅲ

○小住フミ子 上村和子
(鹿児島県立短大)

〔目的〕県の東南部に位置する志布志町は東南アジアや日本各地への流通拠点港として最近変化のはげしい地域の一つである。これ迄報告した地域と比較しながら、惣菜料理や外食利用が地区住民の人々にどのように利用されているのか知るため意識調査を行った。

〔方法〕前回のアンケート調査の一部修正を行い、食生活改善推進員及び前生活改良普及員の協力を得て100部を配布。回収率86%、うち有効回答98%。調査時期平成10年11月。自己記入の留置法。92.9%が女性回答者。

〔結果〕惣菜料理購入頻度は伊佐地方と同じく月に2～3回購入が多く、スーパー利用である(65.6%)。外出、来客等忙しい時の間に合わせに利用(21%)が3地区(鹿児島市、伊佐地方)共に多く、家庭では作れないものがある、作るより安くつくものがある、という選択理由のデータから最近の家庭調理操作の未熟さや合理性、簡便性を外部依存で補っていることがわかる。購入の短所は3地区共に飽きがくる、価格が高い、量が少ないと経済的理由の不満を持ちながら、製造年月日(賞味期限)や新鮮さ、添加物にも注意を持ち種類の豊富さを求めている。惣菜・外食共に食材に使用されている輸入肉については、志布志町、伊佐地方が、値段が高くても国内産にこだわる(33.5%)、安全性に問題があるので買うのを減らす(26.8%)と大きいのは、各々の生活圏に日本一の黒豚養産地を控え、集合的穀物貯蔵施設や配合飼料製造業などの影響が推測された。健康を考えるときに食べる食品は多くの人が刺身を好み、牛肉(鹿児島市では1位)その他蛋白源食品がバランスよく考慮されていた。